

## ウィリアム・ブレイクの「仔羊の歌」 における談話分析

小西 弘 信

### Discourse Analysis of William Blake's "The Lamb"

Hironobu Konishi

#### I

William Blake (1757-1827) の "The Lamb" 「仔羊の歌」は、詩集 *Songs of Innocence* 『無垢の歌』(1789) に収録された詩である。後にこの詩集は、詩集 *Songs of Experience* 『経験の歌』と合本、彫版され、詩集 *Songs of Innocence and of Experience* 『無垢と経験の歌』(1794) として出版された。"The Lamb" は合本の際にも削除されることなく収録され、*Songs of Experience* に収録された "The Tyger" 「虎」と対をなす詩として有名になった<sup>1)</sup>。

Blake の詩に対をなす詩があることは、*Songs of Innocence and of Experience* の副題に "Shewing the Two Contrary States of the Human Soul" (7)<sup>2)</sup> 「ひとの魂の二つの対立する状態を示す」が付されていることから分かる。このように、同詩集において対をなす「無垢」と「経験」が共に存在することは重要な Blake の世界観の表われなのである。川崎美佐子は、「William Blake の "The Lamb" と "The Tyger" を読む」において、Blake の「無垢」と「経験」について次のように述べている。

「無垢」とは罪や穢れを知らず、子どものように純粋で善意に満ちた心のことであり、「無垢の歌」にはそういった子どもの視点から映る世界が描かれている。「経験」はその逆で、「無垢」と対立する概念、つまり現実世界の制度、規則、慣習、常識などに順応し、人間世界にはびこる悪を知ってしまった状態のことである<sup>3)</sup>。

このように Blake が「経験」よりも「無垢」を尊重した考えを持っていたことは明らかであり、そのことが彼をロマン派の詩人の一人に加えている理由にもなっている。

次に Blake の詩の特徴について、松島正一は、その著『ブレイク詩集—イギリス詩人選（4）』の「まえがき」において、次のように述べている。

Blake の彩版印刷による詩集は、詩と挿絵とが一体になって彼のヴィジョンを伝えてくれる。ヴィジョンを見る人であった彼は、黙示録的で預言者的な見者（seer）であった。初期の美しい抒情詩から、後期の深遠な「預言書」にいたる道筋は、詩人であり続けることが人間の思想をどう成長・発展させ、人間を大きくしていくかを我々に教えてくれる<sup>4)</sup>。

Blake の見たヴィジョンについて、土屋繁子は、その著『ブレイクの世界—幻視家の予言書』において、「自然の風物のなかに足りないものを自分で補ってみたものであり、それが神や天使のヴィジョンであった」<sup>5)</sup>と述べている。つまり、物理的な自然だけでは彼にとって何の意味もなく、土屋は「美しい風景とこのヴィジョンとは相俟ってこそ生きてくる」<sup>6)</sup>と指摘している。そして、彼のみが見ることができるヴィジョンを言葉によって定着させるという「ヴィジョンが先で言葉が後」<sup>7)</sup>にこそ、彼の詩の創作の原則があるのである。

では、Blake の詩を読むとはどういうことだろうか。松島は、「薔薇と虫—ブレイク薔薇考」で、Blake の詩の解釈の難しさについて、次のように述べている。

ブレイクの「病める薔薇」は、美しい薔薇に害虫がついて一夜のうちに枯れてしまったことを歌っています。これはだれにでもわかると思います。しかしこの詩は易しいようで難しい作品です。なぜ難しいかという、この詩が一種の象徴詩であるからなのです<sup>8)</sup>。

読者は Blake の詩を読む際に、象徴詩であるがゆえに、詩の個々の語彙の指示的な意味とは別に個々の語彙が内包的に何を暗示しているのかを自分で読み解くことが前提となることを、心得ておかないといけないのである<sup>9)</sup>。土屋も、その著『ヴィジョンのひずみ—ブレイクの『四人のゾア』—』において、Blake の詩の理解と詩の創作で採用した象徴について次のように述べている。

ヴィジョン（彼の読みとった御言葉）がブレイクという媒体を通してうたわれる時、当然読者としての他人の理解が期待されるわけだが、幼児からの彼の幻視に対する周囲の人々の無理解と同様、彼の詩にも読む側とのへだたりが次第に生じて行く。そこで一方ではその落差を埋めるものとしての象徴の効用が生まれることになる<sup>10)</sup>。

ここに Blake の詩のもう一つの解釈の難しさの要因が述べられている。それは、Blake が幻視者であり、かつそのヴィジョンは彼しか見ることができないものであり、彼の詩にはそのヴィジョンを具象化した画が存在するのである。そのため、Blake の詩を読むには、個々の詩にある語彙だけを注目するだけでなく、同時に、その詩に付された画も解釈していかななくてはならないのである。では、彼の詩を深く読む際に、そうした読み方以外に必要なことが何か他にあるのだろうか。

本研究は、Blake の “The Lamb” を、詩の談話として分析し、読者がこの詩をどのように読むことで、難解と言われる彼の詩やヴィジョンの中に潜んでいる彼のメッセージや世界をより深く読み解くことができるかの手がかりを探るものである。

## II

ここでは、本研究の対象である “The Lamb” について、その詩を紹介し、その構成と内容を述べる。この詩は *Songs of Innocence and Experience* に収録されており、以下がその詩である。

### The Lamb

Little Lamb who made thee  
 Dost thou know who made thee,  
 Gave thee life & bid thee feed.  
 By the stream & o'er the mead;  
 Gave thee clothing of delight,  
 Softest clothing wooly bright;  
 Gave thee such a tender voice,  
 Making all the vales rejoice!  
 Little Lamb who made thee  
 Does thou know who made thee

Little Lamb I'll tell thee,  
 Little Lamb I'll tell thee!  
 He is called by thy name,  
 For he calls himself a Lamb:  
 He is meek & he is mild,  
 He became a little child:  
 I a child & thou a lamb,

We are called by his name.

Little Lamb, God bless thee.

Little Lamb, God bless thee. (8-9)

“The Lamb”は、*Songs of Innocence*の“Introduction”「序の歌」において、雲の上にいる一人の子どもから、笛吹きが最初は笛で、3度目は歌で、最後にその歌を書き記すように要請された歌として、まず現れている。その歌は“songs of happy cheer”(7)「楽しい愉快な歌」であり、“Every child may joy to hear”(7)「すべての子どもが聞いて喜ぶ」歌なのである。

“The Lamb”は内容において、小川で水を飲み、草原で草を食む仔羊とその仔羊に言葉をかけている子どもを通して、同じ一つの生命によって結ばれる「神=神の子イエス=仔羊=子ども」という同一性が前景化されるという詩になっている。

“The Lamb”は構成において、2連で構成されている詩である。第1連では、子どもが仔羊に、「お前がお前である所以」を次々と問いかけてゆく。そして第2連では、問いかけた子ども自身が、仔羊に代わって問いかけの答えを、次々と積み重ねてゆくように、仔羊に与えてゆく。このように第1連が「問いかけ」と第2連が「答え」という構成になっている。

渡辺充は、「[子羊]」、「[鹿]」、「おさなごのよろこび」、「おさなごのかなしみ」を読む中で、この詩の読者を仔羊と子どもと同一化させて、以下のように読み解いている。

あらかじめ決められた教義（神、イエス、子羊、ひとの同一性）が存在して、それを大人が子どもの口を通して子羊（読者）に教えるという形にはなっていない。子ども（われわれ読者）がこの歌を歌うことが同時に、こうした同一性を確立し共生の世界を開いているのである。歌の最後で子供が“Little Lamb, God bless thee”と神を主語にして繰り返すとき、子供=読者は神=子供として子羊=イエス=神を祝福しているのである<sup>11)</sup>。

読者は、この詩を朗唱することによって、詩に展開する仔羊と子どもの一体化の輪を広げてゆき、さらにそれは存在のよろこびの感覚にもなって、“Making all the vales rejoice”とあるように、仔羊たちを取り巻く自然界にも響き渡ってゆくことを読者は実感してゆくのである。渡辺は、「こうした一体感はやがてはこの歌の読者であるわれわれをも包み込むことだろう」<sup>12)</sup>と追記している。

また、読者はこの詩で伝えられるメッセージは、先述したように付された画でも伝えられることを心得なければならない。河村民部は、「ロマン派の子ども像—ブレイクとワーズワース—」で、この詩に付された画について、次のように述べている。

この詩付された Blake の原画では、向かって右手に田舎屋があり、その前に多くの仔羊と子どもが一人配されていて、背景には安全保護の象徴として楡木が描かれている。画の両端にある繊細な若木には「経験」の予兆は微塵もない。これは仔羊と子どもの対話の世界であり、歌の中の〈語り手〉と〈聞き手〉との間にはこのような自然の意思疎通が成り立つところに、「無垢」の世界の特徴がある<sup>13)</sup>。

Blake は、この詩に、詩が響かせる穏やかな安定した調子に合わせて「田舎屋」「仔羊」「子ども」が配された画との相乗効果により「無垢」な子どもが自然と一体化した光景を表わしているのである。

### III

ここからは、談話分析によって“The Lamb”を読み解いていく。この詩は、先述したように各連10行ずつ2連で構成されている。

まず、この詩を語句レベルで分析してみる。第1連では、1～2行目で子どもが仔羊に向かって“Little Lamb who made thee/ Dost thou know who made thee”と“who made thee”をくりかえす、次の3～7行目で、その方がお前（仔羊）をどのように創造したのかを“Gave thee”をくりかえし、“life”“clothing”“voice”とお前に与えられたものを一つひとつ挙げながら、優しく問いかける。

そして、第2連で、仔羊に代わって質問者である子どもが“Little Lamb I'll tell thee,/ Little Lamb I'll tell thee!”とくりかえし、それらの問いに答え、仔羊と子どもと創造主とが実は一体であることを“he calls himself a Lamb”と“He became a little child”と、次々と“Lamb”や“child”の言葉を積み重ねていくことで、順に明かしてゆく。その言葉の積み重ねによって、あたかも一体化の輪が広がってゆく様を表わしている。ついに“I a child & thou a lamb,/ We are called by his name.”において、各々が呼称を与えられて、個々の存在を認められていることを仔羊に明かし、創造主によって支えられている存在のよろこびの感覚を伝える。

詩全体が子どもの想像上の対話によって進行し、最後に“Little Lamb, God bless thee./ Little Lamb, God bless thee.”と、ここでも言葉はくりかえされ、仔羊への祝福によって閉じられているのである。このように、談話レベルで特記すべきなのは、第1連1、2行目と9、10行目、第2連も1、2行目と9、10行目に見られるように、Blake が「くりかえし」の効果を用いていることである。談話表現においての「くりかえし」については、泉子・K・メイナードが、その著『談話表現ハンドブック』で、以下のように述べている。

一般的に文学作品に使われる繰り返しは、ディスコース全体の表現効果を狙って使われる。物語のそれぞれの事件ごとに、その部分に集中して繰り返し表現が使われ、それによってその事件の結束性を実現する。また感情的な反応や強調および確認などの行為に伴って使われ、物語のクライマックスを印象的なものにしたりする<sup>14)</sup>。

このように Blake は、「くりかえし」の談話表現が持つ結束性を効果的に使用することで、この詩のクライマックスを読者に印象づけることに成功していると言える。

では、韻律のレベルではどうであろうか。例えば、第1連の1行目から4行目の強勢を置く音節を示すと “**Little Lamb who made thee / Dost thou know who made thee / Gave thee life & bid thee feed / By the stream & o'er the mead;**” (強勢のある語を太字での表記は筆者) となっている。このように、3つないし4つの強勢をもつ2行連が規則正しく配列され、その全く同じ音とリズムにおいてもくりかえしがあり、読者に純粹で無邪気な感覚を与えている。川崎は、「特に“Little Lamb”の滑らかな [I] の反復や同じ言葉の反復は、言葉を繰り返して遊ぶような子どもが好んで口ずさみそうなリズムである。まさに Blake は子どもになりきって“The Lamb”の韻律を作り、リズムによっても純粹無垢な世界を描き出しているのだ<sup>15)</sup>と韻律における効果を指摘している。メイナードも、談話の視点から、「繰り返しはリズム感を達成する側面もある<sup>16)</sup>と述べている。

音のくりかえしによっても、この詩全体が、詩に付された画が描き出すものと同様に優しい牧歌の雰囲気に包まれて、穏やかな安定した調子を響かせている。しかも、リズムと同様に言葉も平易明快であるので、誰もが理解しやすい。強勢を置かれる場所だけでも読んでも十分に内容が理解できることは、“Introduction”にある “Every child may joy to hear”(7) 「すべての子どもが聞いて喜ぶような (歌を)」という条件を満たすと言える。

このようにこの詩は、語句においても韻律においても「くりかえし」という点で一貫している。くりかえしの頻用によって、読者は Blake が見たヴィジョンを何としても伝えたいという彼の意志や切実感を覚えるのではないだろうか。

次に、この詩をスキーマのレベルで分析してみる。スキーマ (schema) について、天満美智子は、その著『英文読解のストラテジー』において、D. E. Rumelhart and A. Ortony<sup>17)</sup> のスキーマ理論をふまえて、以下のように「スキーマ」について定義している。

スキーマとは、長期記憶内に貯えられている総称的概念 (generic concepts)

の表現であって、われわれが日常的に経験する事物、状況、出来ごと、活動、あるいはその連続、などの理解はこのスキーマを何らかの形で利用しているものといえる<sup>18)</sup>。

橋内武は、その著『ディスコース—談話の織りなす世界』において、スキーマの4つの特徴を次のように述べている。

- (1) いくつかの変数 (variables) からなる。例えば、<売買>という概念は「売り手」「買い手」「商品」「現金 (またはそれに代わるもの)」といった変数が含まれる。
- (2) あるスキーマは別のスキーマに包含されることもあり得るので、階層的構造を形成する。
- (3) スキーマは様々なレベルに渡る抽象度をもつ総称的概念を表わす。
- (4) 標準的・ステレオタイプの知識の表現である<sup>19)</sup>。

橋内は、「テキストのカギを握る言語項目とコンテキストに誘発されて、スキーマが活性化し、それが談話の理解を促進させるというのである」<sup>20)</sup>と追記している。

これより、上記のスキーマ理論をもとに、この詩を分析してみる<sup>21)</sup>。スキーマ理論は読者の背景知識であるスキーマに基づく作品解釈に依存している。スキーマ理論に基づく詩の分析の方法について、橋内は、「・・・スクリプト (\$ ) に似た複数のスキーマ (S) からなると考えてみよう。なお、スクリプトの中のスロットには、①小道具 (props)、②参加者 (participants) の役割、③参加条件 (entry conditions)、④結果 (results)、そして⑤一連の場面 (scenes and their sequences) が入る」と説明している<sup>22)</sup>。なお、スクリプトについて、橋内は、「スクリプト (script) は、人工知能の研究家 Schank, R. C らの提唱した概念で、芝居の台本にヒントを得ている。つまり、ステレオ・タイプの知識は<目標>を達成するために時間軸に沿って進行する<行為連続>を含み、一編のストーリーをなす」<sup>23)</sup>と述べている。

## 1. スクリプト・スキーマ

この詩を読むには、以下の仔羊・小川・草原・着物・声・谷・名前・子どものスクリプト・スキーマを押さえておく必要がある。

### (1) \$S LAMB (仔羊のスクリプト・スキーマ)

第1連の場面には、小川と草原がある。小川で水を飲み、草原で草を食む仔羊は、ふわふわとつやのあるよるこびの着物とやさしい声があり、そのかたと同じ名前である。この詩では、第2連の7行目の lamb 以外、全ての仔羊の頭

文字が大文字で記された Lamb であり、ほぼ固有名詞化し、唯一的な存在を表し、まるで特別な意味を持っているかのように感じられる。つまり、lamb「仔羊」という意味を超え、Lamb の持つ他の意味、「無垢」(innocent) や「おとなしさ」(meekness) といった意味が表れ、Lamb がより象徴的な意味を帯びてくる<sup>24)</sup>。また、『ヨハネの福音書』(1:29) に“Behold the Lamb of God, which taketh away the sin of the world.”<sup>25)</sup>「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」とあるように、キリストは「神の小羊」と呼ばれている。さらに、Lamb は第2連の meek や child と結びつき、I と thou と He (God) を同一化させる<sup>26)</sup>。この詩がキリスト教に深く基づいた詩であることは明らかと言える。*Songs of Experience* の“The Tyger”では、Blake は“Lamb”を創造した神が“Tyger”をも創造するという、神の二面性を示している。

(2) \$S\$ STREAM (小川のスク립ト・スキーマ)

場面の小川には、小道具として仔羊がおり、水を飲む。『イメージ・シンボル事典』<sup>27)</sup>では、“river”「10. 生命を表す。たとえばキリストは生命の川であるとされる」とある。『ヨハネの黙示録』(22:1)では、“a pure river of water of life, clear as crystal, proceeding out of the throne of God and of the Lamb”「(命の川の水は)水晶のように輝いていて、神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れている」とある。

(3) \$S\$ MEAD (草原のスク립ト・スキーマ)

場面の草原は牧歌的な景色を作り、小道具として仔羊がおり、草を食む。『イメージ・シンボル事典』では、“meadow”「3. 夢心地または喜びを表す」とある。明るいイメージの草原と対照的に *Songs of Experience* の“The Tyger”では“In the forests of the night;” (24)「夜の森の中で」と“forests”が場面として設定されている。

(4) \$S\$ CLOTHING (着物のスク립ト・スキーマ)

仔羊の体毛はふわふわとつやのある、やわらかい着物であり、よろこびを表わす。『イメージ・シンボル事典』では、“clothes”「3. 着ている人の身代わり。a 生餐の儀式には、身代わりとして聖なる木に吊るされる」とある。

(5) \$S\$ VOICE (声のスク립ト・スキーマ)

小道具の(仔羊の)声はそのかた(イエス)から与えられたやさしい声である。*Songs of Innocence* の“The Shepherd”「羊飼い」では“the lambs innocent call” (7)「仔羊の無邪気な呼び声」とある。『イメージ・シンボル事典』では、“voice”「3. ブレークでは、『御言葉』を表す」とある。仔羊の(やさしい)声とは対照的に *Songs of Experience* の“The Tyger”では“immortal hand or eye” (25)「不滅の手と目」や“shoulder”と“heart”が虎に与えられたものであり、



各々が“deadly terrors” (25)「致命的な恐怖」につながっている。

(6) \$S VALE (谷のスク립ト・スキーマ)

場面の(仔羊のいる)谷はその声でよろこびに満たされる。“Introduction”での谷は“the valleys wild”「荒れた谷」であった。『イメージ・シンボル事典』では、“valley”「3. 羊飼いと聖職者とに関連する」とある。

(7) \$S NAME (名前のスク립ト・スキーマ)

小道具の「名前」はそのかたの名前を表し、『イザヤ書』(43:7)の“Even every one that is called by my name:”「すべてわが名をもってとなえられる者」を踏まえ、イエスは仔羊の名前を自身の名前にされた。『イメージ・シンボル事典』では、“name”「1. 人間の生命力に本来備わっているもの、すなわち魂を表す」とある。

(8) \$S CHILD (子どものスク립ト・スキーマ)

仔羊に問いかけるのも、答えるのも子どもである。その子どもは、そのかたであり、キリスト教の宗教画「聖母子」には、イエスは聖母マリアの側に「おさなご」として描かれている。“Introduction”の第1連で、“On a cloud I saw a child” (7)「雲の上に一人の子どもが見えた」とあり、最終行で“Every child may joy to hear” (7)「すべての子どもが聞いて喜ぶ」のように子どもの存在が記されている。『イメージ・シンボル事典』では、“child”「14. 『文学』 a ブレーク：イエスは無垢を表す。子は詩の心」とある。

## 2. テーマ

上記「1. スクリプト・スキーマ」のスク립ト・スキーマ(1)～(8)は3つのグループに分けることができる。「仔羊」・「子ども」は「参加者」であり、「小川」・「草原」・「谷」は、仔羊と子どもがいる「場面」である。そして、「着物」・「声」・「名前」は、仔羊と子どもが持つ「小道具」である。これら3グループのスク립ト・スキーマは、各々がイエスにつながってゆくという結束性によって、この詩のメッセージである「神=神の子イエス=仔羊=子ども」という同一性を読者に伝えている。同時に、それらのスク립ト・スキーマは、まだ墮落を知らない牧歌的な世界にこそ、「柔和」や「やさしさ」を共有している仔羊と子どもが存在できる理想郷であることを示している。それらは、*Songs of Experience*の“The Tyger”にある「参加者」「場面」「小道具」と対をなすことになる。

この詩の根底にあるキリスト教の教義「そのかたが、おさなごとして、また仔羊として出現している」は、読者に、神およびイエスが「やすらかさ」や「平安」の場にこそ存在し、それらを人間に与える存在であることを教えているのである。

Blakeは、そうした牧歌的な自然や無垢な子どもを尊重している。それは、*Songs*

of *Innocence* のテーマとして「自然」の姿にある子どもの喜びと、子どもが本来もっている万物への共感を讃えることにつながっている<sup>28)</sup>。

### 3. スキーマ間の相互関係

「1. スクリプト・スキーマ」で述べたスクリプト・スキーマの内、仔羊・小川・草原・谷・子どもは相互に連想し合い、全体の雰囲気を作っている。つまり、小川も草原も谷も激しさをまったく感じさせない安らかな牧歌的な世界を展開させ、そこに存在している仔羊とおさなごも荒々しさを表わさず、やさしさを表わすのである。そして、着物・声・名前は仔羊と子どもの所有物であり、各々がイエスを表わす象徴でもある。

詩全体のこうした効果はどのようにして作られるのかについて、橋内は次のように述べている。

詩行に含まれる複数のスキーマを寄せ集め、その中からすでに共通している要素群を選び出すか、要素間にあらたな（連想）関係を確立するかである。そうして新たに独特な複合スキーマが造られ、独自のスキーマを構成する諸要素が結び合わされる<sup>29)</sup>。

このように詩の中の各々の語句が持つスキーマが相互に作用し合うことで、詩は読者に詩の持つ雰囲気を感じ取らせると言えるだろう。

### 4. テキスト構造とテキスト・スキーマ

テキスト・スキーマは、読者に「あるテキストを読んで、類似のテキストを思い起こさせる知識」<sup>30)</sup> としてはたらくものである。もちろん、聖書になじみのある読者なら、この詩の冒頭からの問いと答えからなる形式は、キリスト教の教理問答を思わせられ、この詩の形式自体が詩のテーマに強く反映していると思うだろう。また、この詩の語句のそこそこに、聖書からの反響を聞き取ることもできるだろう<sup>31)</sup>。この詩の特徴として、同じ語句や音のくりかえしが多いことを先述したが、それはバラッドと称される素朴な伝承物語詩も読者に連想させるだろう<sup>32)</sup>。

“*The Lamb*” は、当初 *Songs of Innocence* に収められた作品であった。その詩集のテーマは主に神・善・光・喜びである。一方、*Songs of Innocence* の5年後に出版される *Songs of Experience* のテーマは主に悪魔・悪・暗黒・悲しみである<sup>33)</sup>。*Songs of Innocence* の創作の時点で Blake が、この詩集と対をなす *Songs of Experience* の創作を既に考えていたかもしれないが<sup>34)</sup>、両詩集が完成された時点で、2つの詩集は対照となる。そして、両詩集が合わさることで、読者に各々の詩集の一つひとつ

の詩において、さらに深い読みを誘うのである。その点で、橋内が述べる「詩文の織りなす世界は、連想が連想を呼んで、幾重にも膨らんでいくのである」<sup>35)</sup>という言葉は適切だろう。

“The Lamb”に出会った読者は、先述のようにその挿絵を見ることでも詩の意味を考えることになる。Blakeにおいて、個々の詩に付される画も、詩を構成する大切な要素である。なぜなら、その画に現わされたヴィジョンこそ、先述の「ヴィジョンが先で言葉があつた」のように、彼が言葉よりもヴィジョンを大切にしていたからである。

#### IV

本研究では、William Blakeの“The Lamb”を詩の談話として詩行の語句や韻律とスキーマによって分析して見てきた。“The Lamb”は、象徴詩であり、語彙のスク립ト・スキーマから、キリスト教に深く基づいた詩であることは明らかである。ゆえにキリスト教に基づくスキーマの構築が、読者にとって詩の中の象徴を理解するための前提と言えよう。

Blakeは敬虔なキリスト教徒であり、神秘的なヴィジョンも見ることができた詩人だった。そのヴィジョンから、彼は自分の理想とする独特の神秘的な宗教詩を創作できた。そして、彼は子どものように純粋で、無垢であれば、必ず天国に行けるということを決信し、*Songs of Innocence*を創作した。読者は、そのようなBlakeのキリスト教に対する揺るぎない純粋な信仰心を、*Songs of Innocence*の中でも、この“The Lamb”を通して十分実感するだろう<sup>36)</sup>。

しかし、読者にとって、詩行の語句を丹念に辿りながら、キリスト教を前提にした象徴詩としての読み方以外に、この詩をより深く読み解く手がかりはないのだろうか。つまり読者が、*Songs of Innocence*の“Introduction”から順に読んでいき、各々の詩の詩行の語句の連想によって、読者の内面に既に構築されたスキーマを以て、目の詩と対話することで、難解なBlakeの世界をじっくり理解してゆくことはできないだろうか。また、Blakeの詩を読み解くことで特記すべきことは、読者が、個々の詩に付された画を眺めることでも、その詩の持つ深遠さはさらに増して感じることができるのではないだろうか。そうした画を見ることでも、“The Lamb”に前後する詩や、さらに*Songs of Experience*の詩の読解にもつながっていくのである。なぜなら、画の分析を通して、読解の手がかりとなるストーリーの重要事項がスキーマとして読者の記憶に蓄積されるからである。

Blakeは*The Marriage of Heaven and Hell*『天国と地獄の結婚』(1790-1793)の冒頭にある“Argument”において、“Without Contraries is no progression.”(34)「対立しなければ進歩はない」と言った。この一節は、*Songs of Innocence and of Experience*

の創作の意図につながるものと言われるが<sup>37)</sup>、ここにも Blake の詩を読む際の重要な手がかりを示唆しているように思える。すなわち、彼の詩において、Ⅲの「1. スクリプト・スキーマ」で示したように、詩行の個々の語句が単立に存在するのではなく、キリスト教を始めとする地域に根づいた思想や彼の他の詩の語句との共存および対立によって相互作用しながら、象徴的に彼の世界観を提示しているのである。ゆえに、読者が、難解と言われる Blake の象徴詩を読む際には、彼の他の詩や詩集と必ず関連させながら読むことが、本来の条件なのではないだろうか。その読み方によってこそ、聖書を連想する宗教的な読み方以外に、読者は自分の中に独自の詩の読解のスキーマを構築し、そのスキーマと Blake の世界との相互作用によって彼の詩を読み解き、彼のヴィジョンをも深く読み解くことができる。そして、読者は Blake のメッセージを理解し、彼の世界を垣間見ることができるのではないだろうか。

#### 注

- 1) Blake の “The Tyger” に “Did he who made the Lamb make thee?” (25) があることから、彼が “The Lamb” と対にして、“The Tyger” を創作したことが伺える。
- 2) 引用した詩は次の版であり、( ) の数字は、その詩および詩行が記載されているページ番号を表す。Erdman, David (ed.) and Harold Bloom, commentary, *The Complete of Poetry and Prose of William Blake*, University of California, 1965; rev. 1982. なお、論文中に引用する全ての Blake の詩も、この版からである。
- 3) 川崎美佐子 「William Blake の “The Lamb” と “The Tyger” を読む」『東洋大学大学院紀要』, 53巻, 2016, p. 253。
- 4) 松島正一 「まえがき」『ブレイク詩集—イギリス詩人選 (4)』, 岩波書店, 2004, p. 3。
- 5) 土屋繁子 『ブレイクの世界—幻視家の予言書』, 研究社出版株式会社, 1978, p. 15。
- 6) 同上, p. 15。
- 7) 同上, p. 27。
- 8) 松島 「薔薇と虫—ブレイク薔薇考」『学習院大学文学部年報』, 51号, 2005, p. 153。
- 9) 石井正之助は、象徴詩の難解さについて「作品自身が解答を与えてくれない symbol の意味は、読者が自分で考えて判断するよりほかに仕方ありません」と述べている (石井 『英詩の世界』, 大修館書店, 1976, p. 35)。
- 10) 土屋 『ヴィジョンのひずみ—ブレイクの『四人のゾア』—』, あぼろん社, 1985, pp. 17-18。

- 11) 渡辺充 「「子羊」, 「虎」, 「おさなごのよろこび」, 「おさなごのかなしみ」を読む—『無垢と経験の歌』(2)—」『神戸女学院大学論集』, 39巻2号, 1992, p. 9.
- 12) 同上, p. 9.
- 13) 河村民部 「ロマン派の子ども像—ブレイクとワーズワズ—」, 松村昌家編 『子どものイメージ』, 英宝社, 1992, 1部1章, p. 10.
- 14) 泉子・K・メイナード 『談話表現ハンドブック』, くろしお出版, 2005, pp. 173-74.
- 15) 川崎, 前掲書, 2016, p. 257.
- 16) メイナード, 前掲書, 2005, p. 172.
- 17) D. E. Rumelhart and A. Ortony, "The Representation of Knowledge in Memory." Anderson, J. R. ed. *Schooling and Acquisition of Knowledge*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum, 1977.
- 18) 天満美智子 『英文読解のストラテジー』, 大修館書店, 1989, p. 50.
- 19) 橋内武 『ディスコース—談話の織りなす世界』, くろしお出版, 1999, p. 134.
- 20) 同上, p. 50.
- 21) スキーマ理論を用いての詩の談話分析には, 橋内(同上, pp. 179-84)の「2. William Blake の "The Tyger"」を参考にした。
- 22) 同上, p. 179.
- 23) 同上, p. 136.
- 24) 川崎, 前掲書, 2016, p. 264.
- 25) 聖書からの引用はすべて The King James Version (1611) に拠る。
- 26) 川崎, 前掲書, 2016, p. 264.
- 27) アト・ド・フリース (山下主一郎他訳) 『イメージ・シンボル事典』, 大修館書店, 1984.
- 28) ピーター・カヴニーは『無垢の歌』のテーマとして, 「自然」の姿にある子どもの喜びと子どもが本来持っている万物への共感を讀えることを挙げている(カヴニー(江河徹監訳)『子どものイメージ—文学における「無垢」の変遷』, 紀伊國屋書店, 1979, p. 55)。
- 29) 橋内, 前掲書, 1999, p. 183.
- 30) 同上, p. 184.
- 31) この詩で "Little Lamb who made thee" は "I have made him." (Isaiah 43:7) に, "He is called by thy name," は "I am called by thy name." (Jeremiah 15:16) に, "For he calls himself a Lamb:" は "the Lamb of God" (John 1:29) に各々つながっている。
- 32) バラッドのくりかえしについて, 杉本龍太郎は, 「くりかえしの言葉で調子を

ととのえ、口から口へと伝えていくのおほえやすくする目的もあったと推定されるのである」と述べている（杉本『英詩の実像—イギリス詩への招待』、創元社、1986、p.39）。

- 33) 橋内（前掲書、1999、p.184）は、「26編からなるこの詩集 [*Songs of Experience*] は、主に悪魔・悪・暗黒・悲しみを歌い、専ら神・善・光・喜びを歌う *Songs of Innocence*（1789）と対照をなす」と述べている。
- 34) 渡部は、Blake が1787年の弟の死後、弟から引き継いだ手帖（Notebook）にスケッチや詩の草稿などを書き込んでおり、その中に“Motto to the Songs of Innocence & Experience”「無垢と経験の歌に寄せる題辞」が含まれていることから、この時点で『無垢と経験の歌』の構想は出来ていただろうと述べている（渡部「『無垢と経験の歌』成立と構成：概観—『無垢と経験の歌』研究（1）—」『神戸女学院大学論集』、38巻2号、1991、p.42）。
- 35) 橋内、前掲書、1999、p.184。
- 36) 川崎（前掲書、2016、p.264）は、「Blake のキリスト教に対する揺るぎない信仰が“The Lamb”を通して伝わってくる」と指摘している。
- 37) 永嶋昌子は、「この一節は二詩集合本の意図に深く関わっていると考えられる」と指摘している（永嶋「『無心の歌』における二つの世界」『実践英文学』、35号、1989、p.57）。